

● 3月選評

小島なお

・からすまあ（神奈川県）

その踏切は

一度も閉まっていないから

どの出来事にも自信があった

開きっぱなしの踏切は閉じることを知らない。危険を察知することに鈍感なままでいられたら。春夏秋冬、どんな電車も出来事も素通りさせておけばいい。

・Fim（神奈川県）

夢でしか

逢えないあなたも

マグカップと

数学的に同じらしい

机の上にマグカップが置かれていること。この世のどこかにあなたが居ること。在るという一点において担保される事実が、生きる者の正気を今日も保つ。

・azusa（京都府）

春満月の近くを飛行機が通り

君たちは着陸しなかった

君たちは月を通過してどこへ向かうのか。月には過去の着陸の証明として旗が靡いているという。誰にも所有されない土地へ、春は旅の季節。

・土居 尚子（東京都）

手鏡に制御できない犬連れの

家族がいれば尻尾が欲しい

ぴんと張ったリードの先に家族を引き連れてゆく犬。限りなく家族であり、どこまでも家族ではない獣は、ひとつの共同体を揺さぶるように鏡のなかを走る。

・常田 瑛子（山口県）

揃わない母音を春へ撃ち落とし

夜空を分かつ電線を見る

夜を切り分ける黒い電線。闇のなかに浮かぶ境界線は、空に区画を作るよう。撃ち落とされた後、空に残されるのは均一で平等な寂しい音や光や土地か。

・梶川 文恵（富山県）

チューリップの花びらが

全部落ちた感じの

私のエツ？

チューリップの花びらの落ち方は派手だ。大きな花びらがいちどに落ちるくらい「エツ？」。驚きと戸惑いで棒立ちのチューリップの私が揺れている。

・青粒（三重県）

いなくなる人いない人たった今

載せたジエンガに早く触れたい

手元を離れたブロックは、もう私のあざかり知らぬ運命のなかにある。ジエンガが崩落するのを、人がいなくなるのを、張りつめて見守るしかない。

・ひろみ（京都府）

僕たちも

めちやくちやをしてきたじゃない

犬にお菓子の名前をつけて

政治を批判したり、時代を憂いたりするとき、自分たちは真つ当な場所にいると思っっている。社会はめちやくちな僕たちの仕業に溢れているというのに。

・ 狛犬 吠（岡山県）

クーパーの白の長さで雨は降る

ホームルームの不審者情報

「不審者」という存在が知らされることによって、子どもである自分たちの存在の危うさが意識される。ほそく白い雨に生々しい記憶の質感が宿る。

・ 奥井 健太（滋賀県）

マクドナルドの空の壁紙水温む

妙に明るいマクドナルドの壁紙。印刷された空のイラストに囲まれて、自然と不自然のはざまに暮らして、あやふやな季節の情感を繊細に受けとったりして。